

ネットワークアンケート ③9

糖尿病ネットワークを通して
医療スタッフに聞きました

Q. SMBGの測定記録を療養指導に有効活用していますか？

「血糖自己測定(以下略、SMBG)」は、患者さん自身が血糖コントロールを行う上で最も有用な検査として広く活用されています。その数値から様々な情報を得ることができますが、うまく使いきれていない人も多いと言われます。今回は、SMBGを患者さん・医療スタッフ両者がどのように活用しているのかを伺ってみました。

[回答数：医療スタッフ97名（医師14、看護師36、管理栄養士19、薬剤師13、臨床検査技師7、その他8など。うち日本糖尿病療養指導士32、糖尿病看護認定看護師7）、患者さんやその家族387名（病態/1型糖尿病180、2型糖尿病198、その他9、治療内容／食事療法269、運動療法216、経口薬155、注射薬28、インスリン療法296/重複回答有）]

76%の医療スタッフが「活用している」と答えました。SMBGを行う目的として有用性の高いもの上位3位では、「血糖コントロール状態の把握」、「インスリンの単位数の調整」、「低血糖の把握、予防」でしたが、実際に患者さんの血糖コントロールに役立っているか？との問い合わせに「役立っている」と回答したのは55%と、やや自信のない空気が伝わってきました。

SMBGをうまく役立てられない患者さんの課題としては、「測定しっぱなし(振り返りがない)」が最も多く69%、「測定した数値の評価ができない」が53%、「測定結果を記録していない」29%と続き、測定の目的がわかっていないことが原因の一つになっ

ていることが推測されます。そこで、HbA1cと血糖値の関係について患者さんに指導しているかを聞いてみたところ、「患者さん全員」が62%、「必要とみられる患者さんのみ」「SMBGを行っている患者さんのみ」といった対応の方が約4割でした。

血糖コントロールが治療の中心である糖尿病において、SMBGで自身の血糖値を観察・分析することは大きな意味を持ちますが、実際行っているのはインスリンなど注射療法を行う患者さんです。非注射療法患者さんのSMBGについては86%が「保険適用で実施するべき」とし、「現状のままで

まったく活用されていない 1%

その他 4%

あまり活用しきれていない
19%

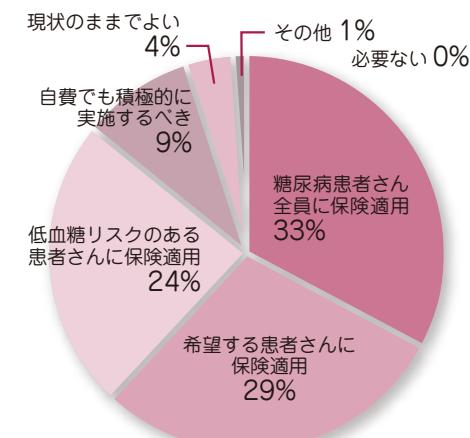
活用している
76%

n = 97

よい」と考える方は4%でした。

自由記述では、「食後に来院を促しても空腹時でしか来ない患者さんが勉強会で食後に測定した結果、同じものを食べても皆違うこと、食後は考えている以上に上がることを実感し、自己管理に前向きになった」、「通常測定しているタイミング以外で測定すると新たな発見があってよい」、「グラフ化して見せると治療に対し理解納得を得られやすい」など、様々な意見がありました。

Q. 非注射療法の患者さんのSMBGについて (n=97)



Q. SMBGを行う目的として有用性の高いもの上位3つは？

(複数回答可／n=97)

血糖コントロール状態の把握	63%
インスリンの単位数の調整	54%
低血糖の把握、予防	53%
血糖改善へのモチベーション	48%
食後の血糖変動がわかる	41%
高血糖の把握、予防	15%
処方薬の効果がわかる	12%
薬の処方量の調整ができる	8%
運動療法時の安全チェック、運動効果の把握	6%
車を運転する時の体調チェック	2%